

『文殊師利根本儀軌經』所説のパタ成就法について

—第4章パタ作成儀則の視点から—

研究生 大塚 惠俊

『文殊師利根本儀軌經』は、種々の密教儀礼を実践するための百科全書的な特徴を有しており、全体としては初期密教經典として位置づけられる經典である。これまでの本經に関する先行研究は、主にマンダラを中心とした視点からなされてきたが、マンダラ以外の密教儀礼に目を向けた場合、本經の広汎かつ煩雜さゆえに、その研究成果は乏しいと言わざるをえない状況にある。

そこで発表者は、マンダラと同様に密教儀礼において重要な機能を有するパタと、そのパタを用いた成就法を説くセクションを取り上げて研究対象とすることにした。本經には、數種類のパタ作成の儀則とそのパタを用いた成就法（以下「パタ成就法」と略）が説かれているが、幸いにもごく最近、田中公明氏によって、ハンピッツ文化財団所蔵の「トンワトゥンデン」とチベット語で称されるタンカや釈迦説法図が、本經第4章のパタ作成儀則に基づく作例として比定されている。本発表では、このような資料的価値の高い第4章パタ作成儀則を通じた視点から、パタ成就法について考察を行った。

第4章所説のパタは、釈迦牟尼、文殊、弥勒の三尊形式を

基調とし、蓮池や山が描かれる叙景的な表現を特徴としている。このような特徴は、經典に描写された仏国土のワンシーンを表現する変相図に近いと考えられ、密教經典に説かれるマンダラのような幾何学的な表現方法とは異質である。そして特筆すべきは、パタの下方に描かれる行者の存在である。初期密教經典所説のパタには、しばしば行者を画像中に描くことが指示されているが、本經第4章の儀則によれば、実際にそのパタを用いて成就法を実践する實在の行者の姿や様相の特徴をふまえてパタに書き入れるべきだとしている。当パタの作例として見出されている「トンワトゥンデン」図の行者と思われる人物に顔だけが描かれていないのは、このような理由によるのではないだろうか。このように行者自身の姿が書き入れられることによって、そのパタはより具体性を持ち、観想していく過程で視覚的イメージを助長する効果が見込まれていたと考えられる。

また、このようなパタの構図に類似した仏教美術の作例として、本発表では阿弥陀浄土図の下方に描かれる化生童子を取り上げた。化生童子は阿弥陀浄土に往生した者、すなわち浄土經典を信奉する者たちの理想とする姿である。同様に、本発表で取り上げたパタに描かれる行者は、成就法を実践して悉地を得ようとする者たちの理想像を投影したものである。このような共通する構図は、各々の信奉する經典に基づく実践行を修す行者たちのモチベーションとなっていたと考えられる。